

伝統の鼓笛隊 引き継いだ

宮城・渡波小

津波逃れた旗「重かった」

慣れ親しんだ校舎を離れても、地域の核であり続けた。間借り授業から仮設校舎へと、学びのかたがかわり続けたこの1年、宮城県石巻市の渡波小学校は、地元とのつながりを模索し続けてきた。



学校再建への道

6日、渡波小は鼓笛隊の「移杖式」を開いた。仮設校舎に隣接する稲井小学校の体育館を借りた。6年生全員が参加する鼓笛隊は50年以上前から続く伝統行事だ。代々使ってきたユニホームや楽器は津波で流された。支援を受けてようやく全員分がそろった。6年生にとっては衣装に身を包んで披露する最初で最後の舞台となった。

校舎修復方針 児童減とまる

この1年、児童は減り続けた。震災前の453人が290人に。新入生は例年50人前後で2クラス編成になる予定だったが、新年度の入学予定者は24人だ。だが、ここへ来て児童減に歯止めがかかり始めた。きっかけは、市が渡波小

を元の場所に戻す方針を明らかにしたこと。津波で1階が浸水した校舎を修復する。現在は約5階離れた仮設校舎だが、2013年度内を目標に戻るといふ。学校には「転校先から渡波小に戻りたい」という問い合わせが相次いでいる。

元の渡波小に戻るのには、保護者、地域、教職員共通の願いがあった。学校は行事のたびに渡波で開けないか検討したが、設備が整わず断念せざるを得なかった。学校側は、1階には音楽室や会議室だけを置き、体育館も2階から出入りでき

るようにするなどの安全対策を市に求める予定だ。

9日には鎮魂の集いを開く。午後2時46分、全校そろって黙禱する。

渡波小は児童7人を亡くしている。つらい記憶がよみがえる恐れがある。被災地の中には、特別な行事を開かない学校もある。集いを開くのは、子どもたちの様子が落ち着いてきたという実感があるからだ。

昨年5月、1、2年と3年以上の2校に別れて授業を始めたころ、特に2年生に不安定さが目立った。授業中も教室内をうろろろする子がいた。絵を描かせると、構図がゆがみ、黒っぽい色ばかり使う。全校そろって仮設校舎に移り、上級生が目配りするようになると、次第に落ち着きを取り戻し、笑顔が増えた。

まず校外学習 地元で再開へ

昨年8月からスクールカウンセラーが週1回常駐している。県もカウンセラーを派遣しているが、月に1回で毎回同じ人とは限らない。それでは足りないとい

学校が独自に確保した。高橋義樹校長は「毎週金曜日の午後には学校に行けば、同じカウンセラーに会えるという信頼感が大切だと思った」という。子どもだけでなく、保護者や教職員が次々に相談に訪れた。

新年度からは、渡波地区での校外学習を再開する。昨年ではできなかった学芸会も開催する予定だ。PTAも動き出す。地域と学校の結びつきをより強める、そんな1年が始まる。(岩波精)

教育

引き継いでよかった」。保護者約40人も参加した。丹野靖識さん(34)は渡波小の卒業生だ。「うちは



残された旗を掲げ、鼓笛隊の「移杖式」で演奏する6年生。楽器や旗を5年生に引き継いだ。6日、宮城県石巻市